相模経済新聞　2020年11月10日号

# 宇宙生命哲学 ことはじめ 30

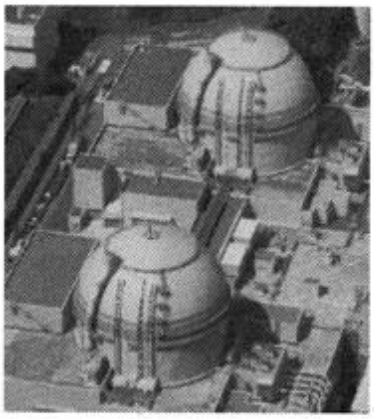
北里環境科学センター名誉顧問／宇宙生命哲学者 伊藤 俊洋

## 人新世は何時始まったか

近年、人類のエネルギー使用量が膨大となり、これが、地球上の生態系に影響を及ぼし、また、地球規模での異常気象の原因にもなっている。このような人類の日常活動に注目した想定上の地質時代を、人新世（じんしんせい、ひとしんせい、アントロポセン）という。人新世は、2000年代に地球システム科学の研究者たちが提唱した新しい概念で、その起点となった出来事や、マーカーとなる化学物質などが多様なために、開始の年代は、議論の最中にある。

人新世の考え方の発端は、空気中の二酸化炭素濃度が上昇して、地球温暖化が進み、異常気象が頻発し、それが原因で人類の日常生活が根底から揺さぶられていることにある。その遠因は、大量の化石燃料が使われ始めた産業革命の時からであり、今から250年ほど歴史はさかのぼる。

海中のマイクロプラスチック問題、第2次世界大戦時に開発された原子爆弾と、その後の核エネルギーの平和利用として始まった原子力発電所による核分裂生成物（いわゆる核のゴミ）の蓄積も重大なテーマである。人類は、都市を作り、交通網を発達させ、人や物資の流通を盛んにし、生活の質を向上させていった。近年はロケットを開発し、宇宙にまで触手を伸ばしている。その結果、自然環境は桁違いのスピードで変化している。人新世の年代は、2021年の国際会議で決まる方向である。



大飯原発3，4号機（福井県おおい町2019. 5. 30毎日新聞 2020. 10. 19より）

私は、人新世の開始は、人類の文明社会が始まった時期と考える。文明活動の起点は、人類が考えたことを文字などにして記録に残したことにある。情報が蓄積されると、技術開発力は進化し、様々なシステムが開発され、人類の生活様式が発展する。農耕牧畜技術が進化し、冶金技術が改善され、産業革命が起こり、量子力学の発見により原子核物理学、有機合成化学、生命科学、半導体科学（情報科学）が人類社会に怒涛のように流れ込んでいる。人類は今、その洪水の中で揉まれながら、懸命に進むべき方向を探している。これらの科学技術を背景にした人類の活動が、地球環境全体に新しい地質年代を想定させる程の重大な変化を与えている。この文明の発祥の時期、すなわち、記録技術が発明されたのは、今からおよそ1万年前のことである。1万年後の人類は、人新世の地層から何を見出すのだろうか。